

【特 集】

ルックイースト政策の30年

人材育成・経済成長・外交・民族間関係

特集にあたって

山本博之

本特集は、2012年で実施から30周年を迎えたマレーシアのルックイースト政策（東方政策）の成果と意義を検討する。ルックイースト政策とは、日本と韓国の成功と発展の秘訣が国民の労働倫理、学習・勤労意欲、道徳、経営能力等にあるとして、両国からそうした要素を学び、マレーシアの経済社会の発展と産業基盤の確立に寄与させようとするマレーシア政府の政策である。この30年間に、のべ約1万5000人のマレーシア人が日本に派遣され、高等教育機関の専門課程で学んだり、産業・ビジネス研修を受けたりしてきた。また、2011年にはルックイースト政策の集大成としてマレーシアにマレーシア日本国際工科院（MJIT）が開設された。

ルックイースト政策が進められてきた30年間、マレーシアは著しい経済発展を遂げ、同政策を取り巻く環境は大きく変わりつつある。30周年を機に、マレーシアと日本の政策当局者やビジネス界は新しい時代に応じたルックイースト政策のあり方について模索を始めつつあるが、ルックイースト政策を直接研究対象とした研究は多くない。このような状況で、日本マレーシア学会（JAMS）では、マレーシア日本研究学会（MAJAS）の協力のもと、ルックイースト政策の成果と意義を検討する共同研究プロジェクトを組織して研究を行ってきた。この共同研究プロジェクトは、同政策に対する学術的な評価にとどまらず、研究成果をもとに日本の外務省を通じてマレーシア政府に提言を行うことも視野に入れて進められてきた。本特集は共同研究プロジェクトの研究成果から4編の論文を集めて編んだものである。共同研究プロジェクトの詳細な内容およびマレーシア政府に対する提言については、JAMS ディスカッション・ペーパーとして刊行される報告書（学会ウェブサイトで公開）をご覧ください。

なお、ルックイースト政策は、「政策」と名前が付きながらも、その狭義の目的である人材育成のための日本留学にとどまらず、日本からマレーシアへの技術移転や直接投資、あるいは日本の労働倫理や集団主義をマレーシア人が学ぶことなど、実に多岐にわたる領域のものごとを含めて捉えられることが多い。厳密に「政策」を定義して

分析しようとする立場ではこの曖昧さは頭を悩ませる原因となるかもしれないが、本特集は、「政策」という言葉に過度にとらわれることなく、融通無碍とさえ言えるルックイースト政策の実態をさまざまな角度から把握することを通じて、ルックイースト政策の成果や意義を多角的に検討する試みである。

また、本特集が研究対象とする政策は、英語名 (Look East Policy) もマレー語名 (Dasar Pandang ke Timur) も『『東方に目を向けよ』政策』という意味を持つが、日本ではマスメディア等による「ルックイースト政策」と外務省による「東方政策」の2通りの呼び方がある。「東方政策」は、特に国際政治史においては、西ドイツによる東欧諸国との関係改善をはかる外交政策としてより知られているが、本特集ではマレーシアの「ルックイースト政策」を指す別の表現であることをお断りしておく。

本特集は4編の論文から成る。前半の2編は、ルックイースト政策の導入に際しての日本側とマレーシア側のそれぞれの背景をふまえて同政策を評価しようとするものである。吉村論文は、500年以上に及ぶ日本とマレーシアの交流史を概観したうえで、日本企業の海外進出という観点から見たルックイースト政策の意味を整理し、同政策の意義と展望を論じている。穴沢論文は、マレーシアが1980年代前半に抱えていた工業化政策への転換という観点からルックイースト政策の必要性を明らかにしたうえで、人材育成の側面に焦点をあて、マレーシアの工業化や経済成長に同政策がどのような貢献を果たしたかを検討している。

後半の2編は、工業化や人材育成といったルックイースト政策の直接の目的以外の領域で同政策が日本・マレーシア関係やマレーシア社会にどのような影響をもたらしたかを検討するものである。鈴木論文は、ルックイースト政策が実施された30年間における日本・マレーシアの外交関係の変化を整理することで、特定の国を名指した世界的にも類を見ないルックイースト政策が日本とマレーシアの外交関係に及ぼした影響を検討している。篠崎論文は、人材育成を通じてルックイースト政策がマレーシアの民族間関係に与えた影響について検討している。

4人の執筆者はいずれもルックイースト政策を直接の研究対象としてきたわけではなく、それぞれの専門分野に即してルックイースト政策の意義と成果を検討した。このことと関連して、本特集のもととなった共同研究プロジェクトは、地域研究のあり方を考える上でも重要な意味を持つと思われる。一般に、地域研究では国外の特定地域を研究対象とし、研究者の出身国・地域については専門外とすることが多い。たとえば、JAMSは日本に拠点を置くマレーシア研究の学術団体であり、会員の多くは日本を直接の研究対象としていない。ルックイースト政策の評価と展望を論じることは、日本社会がマレーシアにとってどのような価値や意義があるかを論じたうえで、それを今日のマレーシアが抱えている課題に照らしてマレーシア人に伝わるかたちで説明する必要がある。日本社会に馴染みがないマレーシア人には、日本社会に特徴的な例

を挙げて説明しても、その意味が十分に理解されるとは限らない。研究者自身が所属する社会が研究対象地域にとってどのような積極的な意義や価値を持ちうるかを研究対象地域の人々に伝わるようなかたちで表現することは、地域研究にとって大きな挑戦であるとともに、現地社会の論理によく通じている地域研究にこそなしうることであるように思われる。

本特集では取り上げられなかったが、ルックイースト政策の意義と成果、そして今後の展望を考えるうえでは、マレーシア日本国際工科院（MJIT）や元ルックイースト政策留学生同窓会（ALPES）などが重要な役割を担うと考えられる。その一部はJAMSディスカッション・ペーパーでも検討されているが、十分に研究されていない領域も多い。本特集をきっかけとして、ルックイースト政策および日本・マレーシア関係に関する研究が今後さらに進むことを期待したい。